

岡山にある犬養毅の生家と記念館

民俗建築アーカイブ担当

The Inukai House and Memorial Museum in Okayama

Editorial Committee

本学会前会長の佐藤重夫先生（以下敬称略）の残した写真の中に犬養邸と書かれた16枚の写真と実測した間取り図が2枚あった。それには昭和27年4月13日の日付があったが、場所も地名も書かれていない。ただ、大樹に囲まれた広い敷地や門構え、庭の優雅さ、座敷などの作りからみてどこの庄屋クラスの旧家であることは分かるが、どこの犬養家かを確定するものは何もない。しかも写真には生活の匂いが感じられず、まるで空き家のように思われるものだったため、写真を見つけたときは強い関心が起きなかった。ただ、門の写真には表札らしきものが2,3写っていたので、拡大してみると表面の一番大きな表札にやっと「犬養仙」と読めるものがあった。その時は不覚にも犬養仙という人がどういう人かもわからず、それ以上調べずに終わっていた。しかしある時、偶然に備中の犬養家に思い当たり、これは貴重な写真ではないかと気がついた。犬養家とは犬養<sup>つよし</sup>毅の生家のはずであった。犬養毅は言うまでもなく昭和6年9月18日に満州事変勃発の不穏状況中、年も迫った12月13日に76歳で第29代内閣総理大臣となり犬養内閣を発足して事変の收拾と経済不況の難局に当たった人である。しかし半年もたたない昭和7年5月15日の夕、首相官邸を襲った海軍将校の凶弾に倒れた、いわゆる5.15事件の悲劇の宰相である。犬養の死で大正13年の加藤高明内閣から8年間6代にわたって続いた政党内閣に終止符が打たれ、軍部が壟断する政治に変わっていく、まさに暗黒時代の入り口であった。

佐藤が写真を撮った昭和27年の頃は広島大学の助教授で、教鞭をとりながら岡山市や広島市の建築審査委員として都市復興計画に当たっていた。また、古建築の調査保存に奔走していたから、犬養家住宅の状況を知っていて気がかりだったのかもしれない。というのは佐藤家と犬養家は早島と備中の旧家で、佐藤家から真北に約7kmの所、昔は歩いて1時間半のところに犬養家があり、古くから親しく交流していた。佐藤自身も学生のとき犬養<sup>たける</sup>健氏（毅の三男）に就職で世話になったことがある。佐藤は写真や図面で記録を取り、家屋の保存を考えていたのであろう。

さて、ここで佐藤家と犬養家を少し<sup>さかのぼ</sup>遡って見てみたい。16世紀頃までは岡山の瀬戸内海沿岸は一面に広がる浅海で、児島や早島をはじめとする大小の島が散らばっていた。中世になって沿岸一帯に荘園が開かれ、中世末期には領地拡大のため干拓事業が始められていった。史実に伝えられる干拓の始まりは16世紀末の宇喜多氏による早島付近の干拓である。すなわち現在の早島町はいわゆる児島湾干拓の中心となった歴史的意味のある土地である。その後17世紀に入ってさらに干拓がすすめられ、今の倉敷市や岡山市南部が陸地となって今日の児島湾が形成された。この干拓は戦後まで続いて工場地帯が建設されている。

佐藤家は本家分家を含めて三家があり、それぞれ奥佐藤、大佐藤、浜佐藤といわれて一族を以て地元の産業や統治に貢献してきた。元々から児島湾干拓の一部に責任を持つ家柄で、旧幕時代は江戸両国に居を構える3000石の旗本戸川家の封地干拓地主として代々務めて来た。その他には量表である「早島表（引通し表）」の産業手形の版元として江戸、難波、堺などの町人、海運業など全てに対して責任のある対応や判断を下し、また、地元が生じる争いや揉め事を調整するなどの統治も果たしてきた。佐藤家の本家（奥佐藤）の裏にある古刹千光寺は佐藤家が檀家総代を務める寺であるが、本堂の横に100坪ほどの佐藤家一族の墓地があり、先祖代々の墓が並んでいる。今はその奥まったところに佐藤重夫先生ご夫妻が眠っている。

一方、備中国賀陽郡庭瀬村字川入に大庄屋を務めた犬飼家（後に犬養と改める）があった。犬飼家の先祖は吉備津神社と関係があり、土地の領主が代わっても特別な待遇を受けて大庄屋を務めてきた家柄である。犬養毅は安政2年（1855）4月20日、源左衛門の二男として生まれた。幼少から四書五経などの経学を修め、明治8年、20歳のとき上京して翌年慶應義塾に学んだが、その頃自由民権に目覚めて大隈重信らと交流を持ち、明治15年4月、27歳のとき自由民権の代表的政党の一つである立憲改進黨（大隈重信党首）の立ち上げに参画した。これを機に同年5月に行われた東京府議員補欠選挙に立候補して当選、以後、郵便報知新聞や朝野新聞の記者を続けながら政治家の道を歩んだ。この頃、犬養は木堂と号していたが、政治家としての犬養はもとより、犬養の全人格を敬慕する同志が増え、犬養の精神を継承し発揚しようという目的の「木堂会」が組織された（明治22年）。この会は全国各地に広がり、木堂会の機関紙である「木堂」および「木堂雑誌」が全国各地の木堂会会員の開明に豊かな養分を与えた。明治23年7月、35歳のとき第1回衆議院議員選挙に岡山県第三区から立候補して当選、その後、一貫して憲政の確立に奔走した。特に大正初めに起こった憲政擁護運動では尾崎行雄（峯堂）と共に先頭に立ち、木堂、峯堂並んで憲政の神様と称えられた。大正11年、革新倶楽部を組織し、翌年68歳のとき第二次山本内閣の通信大臣兼文部大臣に就き、関東大震災の復興に力を注いだ。大正14年（1925）5月に普通選挙法が成立すると革新倶楽部を立憲政友会と合同させて政界引退を表明し、議員を辞職したが、犬養の補欠選挙で地元の支援者が再び犬養を当選させ、彼らの懇請によりやむなく政界にとどまった。しかし政界では隠居の体を取り、長野県富士見町にある別荘白林荘などで悠々自適の生活を送っていた。ところがそれも長くは続かなかった。昭和4年、第26代内閣総理大臣の田中義一（政友会総裁）が辞職の後に逝去し、犬養毅が代わって政友会総裁になる。田中義一の後の総理大臣浜口雄幸（民政党）は昭和5年に東京駅で狙撃され、その後の病状悪化で辞職し、次の若槻禮次郎（立憲民政党総裁）内閣も昭和6年4月14日から同年12月13日のまでの短命内閣で終わった。昭和6年9月に勃発した満州事変や世界恐慌の嵐、軍部の暴走に対応できないまま倒閣したのだが、その後をそのまま引き継いだのが犬養内閣であった。悠々と活躍していた76歳の老政治家が総理大臣になったのは、軍部の台頭に対して政党政治を守ろうとする必死の施策であった。この難局に対処できる政治家が犬養以外に見当たらなかったことに当時の国内情勢が象徴されている。

さて、昭和 27 年頃の犬養家の状況であるが、木堂は 20 年前に亡くなっている。木堂の子は正妻千代との間に長女 操<sup>みさお</sup>と長男彪<sup>たける</sup>がいたが、彪は夭逝してしまい、継嗣となるべき男子がいなかった。斎藤仙との間に彰（二男）、健（三男）、信（二女、戸籍上は千代の子<sup>\*1</sup>）が生まれたが、彰は廃嫡となり、健が継嗣となった。健は 1896 年（明治 29）生まれであるから、犬養が 41 歳のときの子供である。政治家としてますます活躍してゆく時であった。健は学習院大学高等科を経て東京帝国大学哲学科に入学したが、中退して白樺派の作家として活躍していた。しかし 1930（昭和 5）、父木堂を助けるため文学を捨て政界の道を選ぶことになり、第 17 回衆議院議員選挙に立憲政友会公認で東京 2 区より立候補し政界に入ったのである。佐藤が犬養家住宅の写真を取った昭和 27 年は、健氏は第四次、五次吉田内閣の法務大臣を務めていた頃であり、56 歳のときである。健の長男康彦氏の話では、康彦氏が大学生の頃、祖母千代は父（健）の家に住まわっていたという<sup>4)</sup>。康彦氏は昭和 3 年生まれであるから、大学生の頃は昭和 24,5 年と思われる。その頃は既に義母千代は健の面倒を受けていたのであるが、実母仙は何処でどのように暮らしていたのか、それに関する記述は得られなかった。ただ、備中の生家は木堂の兄が継いでおり、表札にあった「犬養仙」は、木堂の兄の孫にあたる人とのことである<sup>\*1</sup>。筆者が初めに写真の表札に「犬養仙」を見て、健の実母である斎藤仙と結びつけたのは誤りであった。（斎藤）仙が住んでいたという話もなかった。

そのようなわけで、木堂の生家は長い間空き家のまま管理されていたが、昭和 51 年 12 月に犬養家が敷地および家屋一式を岡山県に寄贈し、昭和 52 年に敷地が岡山県指定史跡に指定され、昭和 53 年に主屋と土蔵が国の重要文化財に指定された。昭和 54 年に主屋及び土蔵の解体修理が行われ、主屋は柱や梁の形跡を基に正徳年間（1711～1716）の四代目源左衛門の代の姿に復元された。解体修理前は 19 世紀初め頃にかなり変更が加えられていたもので、佐藤の残した写真は修理前の姿を写した貴重なものである。生家は昭和 56 年 4 月から一般公開されてきた。それから 12 年後の平成 5 年 5 月に木堂の功績や遺品、家族との触れ合いを語る品々を蔵した木堂記念館が建てられ、木堂生家と木堂記念館が並んで 10 月から一般公開されている。また、近くには犬養毅、健親子の墓がある。東京・青山墓地の「犬養毅之墓」には健氏も一緒に納骨されているが<sup>\*1</sup>、親子で故郷の地に帰ったのである。

## 参考文献および注釈（\*1）

- 1) 「犬養木堂記念館」パンフレット
- 2) 『木堂雑誌にみる木堂談叢』犬養木堂記念館発行、平成 11 年 4 月
- 3) 犬養康彦著『五・一五事件と私』犬養木堂記念館発行、平成 15 年 3 月
- 4) 『犬養木堂とアジアの人々』犬養木堂記念館発行、平成 18 年 3 月
- 5) 佐藤重夫著『卷雲一思杏・佐藤重夫の光跡一』佐藤迪彦発行、平成 29 年 8 月
- 6) 『旧犬養家住宅修復工事報告書』岡山県郷土文化財団、平成 4 年 10 月

\*1 「犬養木堂記念館」学芸員の教示による

注: 写真の記号が(S27INUKAI,)で始まるものは昭和27年に佐藤が撮影した写真、写真記号が(2018,)で始まるものは2018年10月18日、アーカイブ担当(古川修文)が撮影した写真である。

**謝辞** 本稿の執筆にあたり、木堂生家並びに木堂記念館のご協力とご教示を戴いた。ここに記し謝意を表します。

「民俗建築アーカイブ」の写真・資料をご希望の方は下記へ申し込んで下さい。無料で提供します。

民俗建築アーカイブ担当 古川修文 [syu-bun@jcom.home.ne.jp](mailto:syu-bun@jcom.home.ne.jp)